

教職教養課題特講 I におけるディベート実践：平成 23 年度からの改善

教育心理学教室・富田英司

保健体育教室・田中雅人

目的

本学部の学生は比較的安定した友人関係を持ち、キャンパスで賑やかに会話し、授業内でもスムーズにグループワークに参加できている。その点では彼らのコミュニケーション力は高い。また、プレゼンテーションや就職面接の練習において効果的に説明できる者も多い。つまり、教員養成学部の学生は、親しい者との日常会話やフォーマル場面での一方的伝達については、既にある程度スキルを持っている。しかし、その2つの間にあるような場面ではその限りではない。例えば、知人や教員、学校関係者等との打合せや世間話、ゼミ等での議論等において、彼らは適切な談話ジャンルや非言語的行動を活用できず、ぎこちない会話になりがちであり、意見交換や合意形成、問題解決をおこなうことが難しい。

このような比較的公の場でインタラクティブに話し合いをする言語的能力や行動レパートリーの獲得は一朝一夕に獲得されるものではなく、大学入学直後から長期にわたって友人達と議論を重ねて初めて身につくものである。

そこで、教職教養課題特講 I では日頃の議論活動の促進に少しでも寄与できるよう、昨年度よりコミュニケーションの実践的な訓練の場を半分程度設けている。本報告では、昨年度最初におこなわれた本授業を改善し、その改善が学生による自己評価にどのように反映されたかという観点で検討をおこなった。

授業の概要

対象授業 「教職教養課題特講 I」は2年次の後学期に受講することが想定されている。平成 23 年度については、履修登録した 113 名のうち、アンケート回答者は 97 名であった。平成 24 年度につ

いては、履修した 123 名のうち、アンケート回答者は 106 名であった。担当者は、保健体育教室の田中雅人准教授と教育心理学教室の富田英司准教授の 2 名であった。

教科書 『大学1年生からのコミュニケーション入門』中野美香著 ナカニシヤ出版

授業スケジュール 第1回授業の前半はオリエンテーションをおこなった。第2回授業の後半から第3回に教科書を使って、ディベートの方法について実習を織り交ぜながら、解説をおこなった。第3回では、最初の試合に取り組んだ。その後、第4回、第7回、第10回、第12回、第14回、第15回は試合を中心として、必要なインストラクションを授業の最初におこなった。ほとんどの回では、ビデオまたは IC レコーダーによって練習内容が記録された。

授業評価 最後の授業において記名式の振り返りアンケートを実施した。その項目は多岐にわたっており、本報告書ではその一部のみの報告とする。

授業の改善点 本授業では昨年度と比較して次のような改善を試みた。(1) 学生の態度や心構えに関する厳しいコメントを減らした、(2) 教科書の初歩的な部分(主張と反論)について、前年度よりも説明を丁寧におこなった、(3) 学生からの質問等に応じて、同じ内容であっても複数回説明した、(4) 時間外学習を大幅に増やした: オンラインあるいは対面式でのディベートを必ず毎週おこなうようにした。(5) 学生がディベートの論題を自分たちで選ぶ機会を増やした。

結果

ディベートのイメージ ディベートを始める前と比較してイメージがよくなったか尋ねたところ、平成 23 年度については 97 名のうち、79 名が良く

なった, 18 名が良くなっていないと回答した. 平成 24 年度については 106 名のうち, 91 名が良くなった, 15 名が良くなっていないと回答した. 実数において昨年度よりも多くの学生のイメージが良くなっているが, カイ二乗検定をおこなったところ, 有意な差は見られなかった.

ディベートのイメージが良くならなかった理由

ディベートのイメージが良くならなかった理由を探るために, 次の 11 項目について 5 段階評定を求めた: ディベートの授業がわかりにくかったから, ディベートが以前よりもできるようにならなかったから, ディベートをやってみたら難しかったから, 友達と一緒に活動するのが楽しくなかったから, 意見のよさを競うことが楽しくなかったから, 情報収集や原稿作成などの準備が楽しくなかったから, 話すことが楽しくなかったから, 自分の主張をすることが楽しくなかったから, 相手に反論・質問されるのが楽しくなかったから, 自分とは異なる意見を知るのが楽しくなかったから, 論題について知識を得るのが楽しくなかったから.

検討の結果, 全ての項目において前年度と比較して統計的に有意な差は見られなかった.

ディベート訓練の効果 次の 25 項目について 5 段階で自己評価を求めた:

(1)考える力がついた, (2)ボキャブラリーが増え, 表現の幅が広がった, (3)知識が増えた, (4)話すことに興味をもった, (5)社会で起きていることに興味をもつようになった, (6)興味のあることについて新聞やインターネットなどで調べるようになった, (7)友達や家族と社会問題などについて意見交換をするようになった, (8)大学の授業に積極的に参加するようになった, (9)価値観や考え方の多様性に気付いた, (10)他者を尊重するようになった, (11)話し方など, コミュニケーション方法について周りの人からほめられるようになった, (12)同じクラスや同じ学科で友人が増えた, (13)大学に来るのが楽しくなった, (14)人と話すことが楽しくなった, (15)現在だけでなく将来のことなど, 物事を長期的に考えるようになった, (16)物事を判断する時に賛成・反対やメリット・デメリットを考えるようになった, (17)見聞きしたことに対して疑問をもつようになった, (18)人に何かを説明するのが上手になった, (19)自分の日々の成長が実感できるようになった, (20)ディベートの授業で習ったことを日常生活でも応用するようになった, (21)あいさつをするように

なった, (22)目標を立てて, 実行するようになった, (23)人が討論しているのを, 関心をもって聞くようになった, (24)すすんで自分で勉強するようになった, (25)聞きたいことがあれば, うやむやにせず質問するようになった.

検討の結果, 大学に来るのが楽しくなったという項目においてのみ前年度よりも高くなった ($t=2.15$, $df=200$, $p=.0326$). この授業では毎週のようにディベートの練習を時間外学習として実施したことが, この変化に繋がっているのかもしれない.

次年度に向けて

ディベートについてももう少し学びたかったことはなにかという質問に対して, 「総括の方法についてより詳細に知りたい」「実際のディベートをみてみたい」という意見が多く見られた. 総括については授業でも 2 度ほど説明しているため, おそらくグループ別の指導でどこがわかりにくいかな等聞いてアドバイスをしていくということが必要になると考えられる. しかし, 120 名を超える授業では全員に個別指導することは難しい. この点をどうカバーするか今後検討を重ねたい.

ディベートの手本やモデルを見たいということについては, 現在の大学教育が学年ごとに割られていることで先輩等をモデルにすることが難しいという状況がある. オンラインやビデオとして手に入る本格的なディベートは英語でおこなわれているものがほとんどである. 教員が手本を示そうと思っても, ある程度ディベートの経験がある教員が 4 名以上必要であるということから困難である. このような困難さはあるが, これらをカバーするために, 今回の授業の最後におこなったゲームを今後の受講生のための 1 つの事例として活用することが考えられる. 前年度の先輩たちの様子を全員で視聴した上で教科書に取り上げられている内容との関連性に触れていくことによって, 教科書の内容を受講生が自分に引き寄せて考えることができるようになるかもしれない.